

OPINION オピニオン・スライス STREET

世界に二人だけの

落語作家のひとりとして

落語作家

小佐田定雄さん

——上方落語の魅力について簡単に教えてください。

上方落語には、江戸の「与太郎」のような根っからの愚か者は登場しません。上方落語には「喜六」というポケ役は出てきますが、皆から「アホ」と呼ばれていてもちゃんと仕事はしているし、家族もいる。ただ、ちょっと抜けている…というか世間を斜めに見ている。「おもしろいやつ」の代表が「喜六」なんです。

——どういう経緯で会社員から落語作家に転身されたのですか。

前の仕事は損保会社の社員でした。そこで、今回のインタビューの仲をとりもってくれた弁護士さんともお会いしたのです。学生時代から落語に関心があったので、仕事に就いた後も桂枝雀さんに自作の「幽霊の辻」（ゆうれんのつじ）という落語の台本を送ったりして、桂米朝一門の落語家さんたちとつながりができ、土日は必ずと言っていいほど落語会に行っていましたし、新作落語も書いたりしていました。それが、10数年たつうちに、だんだんと評価されるようになって、本業とのバランスの取り方が難しくなってきました。

それで、このままでは、仕事が中途半端になると思って、「落語の世界から離れよう」と思たんです。落語と縁を切るにあたって、誰に引導を渡してもらったらいいか…と考えて桂米朝師匠にお願いすることにしました。米朝師匠というお人は、アマノジャクなところがあって「師匠、こういうふうにし

たらええと思うんですが…」と相談すると「いやいや、それはやめたほうがええ」というように、こちらの意見と反対のことを必ず言わはるんです。そこで、わざと師匠に「会社を辞めて落語一本で生きて行こうと思います」と相談を持ち掛けたんです。そうしたら師匠は「会社を辞めたらあかん」と言うてくれるにちがいないので、その言葉をきっかけに落語との縁を切ろうと思うてたんです。

ところが米朝師匠の答えは「それもええな」の一言でした。今さら「いやいや、それは…」と言うわけにもいかず、結局はこちらの世界に来てしまいました。それ以来、米朝師匠も枝雀師匠も私が落語作家として食べていけるように、いろいろと気を遣ってくださいました。

——米朝師匠の人となりを話してください。

師匠は、ほんまに暖かい人ですわ。「世話焼き」と言うていいくらい、気にかけてくださいます。それと、私が言うのもなんですけど、すごい勉強家ですね。多くの古典落語を復活させた。そして、落語以外の上方歌舞伎・文楽・狂言・舞踊などの古典芸能の分野の方々とも交流を深めておられて、一門のお弟子さんや私なんか、いま他の古典芸能の分野の方々とお付き合ひさせていただいているのも、師匠のおかげです。

かつて、上方落語四天王と言われた米朝師匠・3代目桂春團治師匠・5代目桂文枝師匠・6代目笑



福亭松鶴師匠の4人は、お互いの持ち場があったように思います。米朝師匠があえてわかりやすい型で上方落語を全国区の芸として広めていると、他の三人さんは大阪の味を濃厚に残してくれた。それぞれ、お互いの芸を尊敬してはって、上方落語が風前の灯と言われた戦後の時期に、みなさんと協力して落語を盛り上げてきたという連帯感がありましたな。

——2代目桂枝雀師匠とのお付き合いも長かったんですね。

会社員時代に、先ほどの「幽霊の辻」という作品を、枝雀師匠のために書かせてもらいました。この作品が私の落語作家としての人生のスタートです。

枝雀師匠は、稽古の虫でした。始終、稽古ばかりしているのです。舞台の出番を待ちながら、舞台裏で、その日に演じる噺以外のネタを繰っ

てはるんです。「師匠、今日はその噺とちがいますよ」と声を掛けると、「ああ、これは私が趣味でやってるお稽古ですから、ほっといてください」と。不思議なお人でした。

ちなみに、私が会社を辞めて作家になりますと言うと、「そもそもあんたが十三年も会社で生活していたんが間違いやったんや」と祝福してくれました(笑)。枝雀師匠とは落語だけでなく、ラジオ、テ

レビ、本、お芝居など、ずいぶんいっしょにお仕事をさせていただきました。

——落語作品の著作権ってどうなっているのでしょうか。

落語原稿の著作権料ですか？それは落語家さんによってまちまちですわ。台本を買取るという型の方もいれば、印税のように一回演じるごとに律儀にお金をくれはる方もいらっしゃいます。ただ、基本的には、私が作品を提供した師匠とその一門が演じるということになっています。他の一門の方が演じる時は律儀にちゃんと挨拶してくれます。こういうところは、古典芸能の世界のきっちりしたところですね。先生方の言葉でいえば、譲渡、包括許諾、個別許諾ということにでもなるんですかな。

——創作のご苦勞を聞かせてください。

落語の原稿は、やはり落語家さんとの相性ですな。私がいいと思っても、演者の気が向かなければ中々演じてはもらえんもんです。逆に、気にいってもらえると、繰り返し演じてもらえます。250本ほど作りましたが、リピートしてもらっているのは「貧乏神」など40本くらいでしょうか。基本的には、オーダーメイドなので、潰しが効かないと言えば、効かないでしょうな。

原稿を作るときの秘訣？それは「締め切り」ですな。色々と技術はあるのですが、やはり、締め切りがあるから、きちっと、作

品を仕上げることができるのではないのでしょうか。直前になって慌てることはおまへんな。やはり、1週間以上前にはきちっと仕上げるようにします。

あと、創作するときには、「落ち」が先にできていて、後から筋を書くというケースは面白くないことが多いです。まず、おもしろいシーンをひとつ思いついて、この状況になるためにはどんな導入部が要るやろか…と考えて、おもしろいシーンの後はどないするんやろ、という風に話がどんどん展開することがあります。そんなと

きには、面白い作品になることが多いですな。

——尊敬する落語作家はいますか。

専業の落語作家は、今のところ私と弟子で嫁の「くまざわ あかね」だけやと思います。東京には居てはるのでしょうか？他の演芸台本を書いていて落語も書くという方は居てはるようですけど、落語専門というのは世界に二人だけです。そもそも落語の台本は、演者自ら作ることが多いですから、落語作家というのは新作は演りたいけど自分では書けない…という落



語家さんだけのための「隙間産業」
なんです。

私自身は落語家にはなりません。
というか、なれません。お客さん
のいる舞台上で一人で20分も話をす
るなんてそんな怖いこと、ようし
ません。今日は、受け答えするん
で長いことしゃべってますけど、こ
んなこと言っではあかんかもしれ
ませんが、どんな若手の落語家さ
んでも、一人で20分とか、場を持
たせているでしょう。すごいこと
やと思います。

———今後はどのような作品を手掛け
るおつもりですか。

今後は、「古典落語」になる噺を
書いていきたいと思っています。
「古典落語」というのは、一般的に
は、昔に作られた落語なので、今、
古典落語を書くと言うとおかしい
と思われるかもしれませんが。「古
典」というのはジャズでいう「ス
タANDARDナンバー」で、いつま
でも古くならない作品のことだと
思います。米朝師匠などは、昔の
文献などを紐解いて、古典落語を
復活させました。もともと落語は
口伝でしたから、そんなに昔の文
献も見当たりません。

例えば、古い文献にタイトルだけ
が残っている落語があります。「屁
臭の最中」とか「ぼたへちや」とか、
タイトルだけ残ってて、どんな話だ
ったのかの記録は全く残っていま
せん。そこで、そのタイトルだけをた
よりに、イメージで「こんな落語や
ったのかもしれない」という噺を考
えたいと思っています。

———弁護士に対するアドバイスはあ
りますか。

言葉を文章にするという点では、
おんなじ側面があります。話をう
まく収めるのも、弁護士の仕事の
はずです。こっちもそうですけど
(笑)。あと、私も会社員の時に債
権回収とかの業務をやってしまし
けど、弁護士さんはいつも仕事で
緊張してはるんと違いますか。で
も、ふっと力を抜いてみることで
すな。そうすれば相手と和解がで
きるかも知れません。枝雀師匠の

いわれた「緊張の緩和」が大事や
と思いますな。

4月16日(月)から20日(金)まで池田
市民文化会館で「いけだ落語うい
ーく」を私と芸能史研究家の前田
憲司さんがプロデュースしてます。
時間に余裕があれば、ぜひ、皆さ
んでお運びください。

インタビュー：松本 岳、阿部秀一郎、
伊田真広
撮影協力：ダイニングカフェ「martha」
<http://www.marthanet.com/>
写真撮影：高広信之

INFORMATION

アゼリア呉服座寄席

いけだ落語ういーく

第六回

2018年4月16日(月)～22日(日) 池田市民文化会館

上方落語の楽しさを知り尽くした落語作家と芸能史研究家がプロデュース！
今回のテーマは、明治150年・忠臣蔵・七光・あんけら荘・ツカ三昧など、
さあ～落語三昧の一週間、はじまり、はじまり～

落語作家 小佐田定雄 芸能史研究家 前田憲司

桂 福徳治	林家 染丸	桂 さん枝	桂 文珍	四代目 桂 春園治	桂 ざこば
桂 春若	桂 金三郎	桂 米園治	桂 梅園治	桂 小春園治	桂 南光
桂 あやめ	桂 春樹	桂 南天	林家 花丸	林家 染丸	桂 文三
桂 春樹	桂 南天	桂 文三	桂 染丸	桂 文三	桂 染丸
桂 春樹	桂 南天	桂 文三	桂 染丸	桂 文三	桂 染丸
桂 春樹	桂 南天	桂 文三	桂 染丸	桂 文三	桂 染丸

2月24日(土) チケット発売

お問い合わせ
池田市民文化会館
☎072-761-8811
〒563-0031 大阪府池田市天神 1-7-1
URL <http://www.azaleanet.or.jp>

プレイガイド
※チケットは各プレイガイドの営業時間内にお買い求めください
池田市民文化会館 072-761-8811
いけだ市民文化振興財団 072-750-3333
池田市役所1階会計管理室 072-752-1111
池田市観光案内所 072-737-7290
ローソンチケット 0570-084-005
(Lコードは裏面に記載)
※ローソンチケットは各プレイガイドの営業時間内にお買い求めください

主催：いけだ市民文化振興財団